

## 新潟県中越沖地震 現地視察レポート

2007.7.19

JIA 災害対策委員 大羽賀秀夫

(NPO 川口市民ボランティアネット 代表理事)

平成 19 年 7 月 16 日 AM10:13 発生の新潟県中越沖地震(M6.8)は新潟県柏崎市・刈羽村・長岡市小国地区・長野県飯綱地区等が被災した。今回は下記の行程と地区を視察することができた。その報告です。

7 / 18 pm23:00 埼玉県川口から外環・関越自動車道をゆっくり走り、越後川口 SA に 7/19am01:50 着。仮眠 1 時間半後に出発する。

今回は NPO 川口市民防災ボランティアネットのメンバーでもある建築士 2 名と同行している。

小千谷 IC・国道 291 号線を全くの交通傷害無しで、am03:50 に柏崎市役所前駐車場に到着。

夜明け前の薄暗闇の中 am04:20 から柏崎市南町と市役所交差点の間にある交差点から県道 151 号線を東に向かう。

柏崎市 東本町二丁目 両側アーケードのある商店街。そのアーケードに倒れかかるように被災建物が並ぶその商店街の半数以上が危険家屋表示。その中の「マリオネット」は余震で崩壊が進行し、近づく事ができない。間口全面が開口の木造前面シャッター商店が多い。隣地の僅かな空間に倒れ込み、互いに支え合って辛うじて街並みらしく見える。

市の観光スポットでもある「閻魔堂」。落ちた破風屋根の構えと下敷きの車。脇の駐車場が地区の方達の避難エリアと見え数人が炊き出しの準備をはじめている。

数ヶ月後、シャッター街から「歯抜けの商店街」への変身。その後は……。

### **この辺りから今回の地震は、能登半島地震の輪島市街地より大きな被害であることが実感される。**

東本町交差点を更に東に向かう。錦町・豊町・扇町と進み。両脇の路地を覗いても、通りと同じ 3 軒に 1 軒相当の全壊状態。間口だけではなく桁行きも同時に破壊され路上に倒れ込んだ家屋が多く見られる。かなり鮮明となってきた街区に黒い瓦が光る。井戸水から引き込んだ用水を生活用水として洗濯や食器洗いをする住民が目立つ。気軽に挨拶を返す人々からは逼迫する緊張感があまり感じられない。会話の笑顔にもあまり怖さを感じない。4 日目の朝の疲労の蓄積は？ 有るはずなのに、よそ者の私達に爽やかな朝の挨拶をして下さる。能登半島地震の疲弊感が個々にはあまり感じられない。

途中の越後線の線路盤が大きく変形し、線路がうねる。周辺の崩壊家屋・地盤の変形を探ると、北西方向の方向性を幾つか見いだせる。海岸に向かって何らかの地盤変形が起きているのか。am6:00 が過ぎ徒歩 2 時間の疲れを感じ始める。県道より 1 街区北の通りを市役所方面に戻る。約 6m 幅の街路の約 1/3 の家屋に全壊・半壊が見られる。

### **やはり輪島市街より被害は大きい。**

am7:00 柏崎市役所でもう一人のメンバーと落ち合う。NPO 川口市民防災ボランティアネットワークのメンバーで、埼玉を中心に活躍した災害支援グループのリーダーだった、ジャーナリストの彼は前日に現地入りして彼なりの行動を起こしていた。

小休止の後、今度は 4 名で西本町周辺に向けて行動を開始した。東本町とは違い、神社仏閣と大規模商店が多い街区である。県道 151 号線より北側が海岸と平行に丘陵地が続き、南側が南東に向け低地となった地形。この地形が気になり始める。

市民プラザの建物周辺で地盤が大きく陥没・不同沈下・歩道ブロック・縁石・側溝が変形している。南から北に道路路盤が 100mm 以上移動したように感じられてる。南の側溝のグレーチングが跳ね上げられ、北側の縁石に間隙が見られる。ある部分はその逆の現象が見られる。

地区の方に聞くと、100m 南側低地にある東西の 5m 道路が旧の海岸通りで、151 号線は砂丘地中腹に造られた道路なのだそうである。砂丘地を乗り越えた約 500m 先が海岸であるこ

とから、この変形現象が半分理解できたような気がする

県道 151 号線沿いの 4 軒に 1 軒の割合が、全壊・半壊が続いた。西本町交差点から、南に 1 街区移動すると、やはり家屋の被害は多い。全壊した酒造会社近くの寺社の崩壊は日本海文化の歴史からも残念である。意外と残った墓石がやけにきれいだと感じてしまう。

この地域では何組もの応急危険度判定調査班が入っているが、何故か緊張感がない。

### 避難所 (柏崎小学校)

西本町を移動中、海岸方向にある避難所の一つ柏崎小学校に回り込む。報道に必ず出てくる中規模(約 250 人収容)の避難所の一つ。小学校としては大きめの体育館。避難所としてかなり恵まれているのは、直ぐ脇に低学年用の遊具がある校庭があり且つ植樹によって囲まれていること。体育館内部からも保護者が目視できる大きさであること。このゆとり空間は避難後のコミュニティに大きく貢献できる。直ぐ隣が屋外プールであることはトイレの洗浄水・清掃用水として確保できることはふんだん且つ至便で使えること。更衣室が有る事。外に屋根付きの炊事場・物資配布・蓄積が可能な場所があること。車が横付けできること。等の設計者の意図とは違うだろうが「避難所」として有利な配置・規模が確保されていることに注目できる。

ただ、体育館の堅い床に薄いビニールシートが配布されているが、これではキツイ。せめてエアーマットの配布は毛布と同時に必要だと思う。もう一点。避難所内の通路にコードバッチ程度の敷物が有れば通路幅の確保と通行の振動、騒音がかなり減衰できる。コテネーターする際の「原則」をもっと周知すべきである。

### 災害対策本部

柏崎神社の裏手に行くと神社敷地より 2.5m 程度低地に住宅が並び、神社の一角に「六角堂」があり、その基部が大谷石の礎石であった。それが低地側にはみ出そうとしている。又、2.5m の段差は石積みの擁壁であるが、大きくはらみ始め且つ、下の 4.0m 道路の側溝幅をかなり狭めている。この地域は海岸砂丘を造成している事から、地盤変形が進行していることは明白である。道路を挟んだ住民から、擁壁の崩壊と六角堂の倒壊による人家を含めた二次被害の危険を問うて来た。我々からみてもかなり切迫した危険を感じる。西本町の町会長を名乗る方から、某商店建物の傾きが進行し人命の危険を訴えられた。西本町 3 丁目の住民の方達から「現況調査に未だ来ない」との訴えもお聞きした。

それぞれの方達は異口同音に「災害本部に連絡しても何の処置もない・連絡すら付かない」と訴えられる。我々は視察に過ぎないこと。でも帰路に災害本部に立ち寄り伝えることを約束する。約束通り、柏崎市役所「災害対策本部」に立ち寄り。さほど大きくない「大会議室」に人員が居て住民の対応をしている。我々は JIA に所属する建築士であること。視察中に「住民からの依頼」を伝言するために来た旨話すと丁寧な対応であるが、建築専門部署に申し出てくれという。災害時は「災害対策本部」が対応を一本かするはずだと思いつつ、別棟の「建築住宅課」に向く。名刺を出し名乗りを上げ、市民からの伝言であると内容を伝えるが、memo 記録すらしない。一通りの話の後に出了た返答は、我々としては事情は判るが具体的な対応策は「出来ない」という。どうも災害対策本部にもこの部署にも「緊張感がない」。神戸は別格としても、中越にしても能登にしてももっと緊迫した空気があった。とにかく情報を集め、市民を守ると云う雰囲気があった。だから我々も協力するという気構えで現地入りした。輪島市内より被害は大きい。そう言えば何となく街全体に緊迫感がない。よく言えば「ゆとり」がある。悪く言えば「災害慣れ」していると感じる。3 年前の「中越より揺れた」との言質からは地震災害への周知・注目は感じられない。M6.8 は大地震ではなく M 0.1 の差は 3 倍強の差があること、僅かな差で被害は大きく変わる事を理解していない。マニュアルで対応しているのだろうが、人命を優先すれば方法はいくらでも考えられる。まして市民からの切実な対応が何故災害対策本部ではないのか。市外への思惑が優先されていないか。何があっても、身分と生活が保証される公務員の甘さを感じる。神戸市役所で「俺たちも被害者だ」と叫ぶ役人を思い出した。

### 避難所 (松波コミュニティセンター)

柏崎市内を午前中に離れた我々は、刈羽に向かう途中松波地区に入る。国道 352 号を北上、

沿線に全半壊の家屋が散在するのを見ながらの移動。松波コミュニティセンターは約 150 名収容の避難所、比較的狭い体育館に避難者が居る。この体育館は風通し悪い設計。これでは暑い。ちょうど訪問したときは米軍の協力で、各避難所にエアコン設置の実務協議をしていた。市社協のコーディネーターによる運営と思っただが、自衛隊の炊き出し・給水に頼った運営であった。5~6 人のボランティア+市社協+県社協のメンバーが配置されていた。自衛隊の隊員の多いこと。そう言えば各避難所にも自衛隊の車両・人員とも多く、警察も消防も殆ど見ない。市民住民の自発的活動や発想が避難所運営に感じられない。災害 = 自衛隊の図式がどんどん高まっていると思う。本当にこれで良いのか。避難所内のコネクターと不足と他からの設備・人員・物資に頼る運営。それは全て税金・公的資金。気になる。

### 刈羽村 地区

原発が停止し火災が起き、消火もされず一時放置。汚染水流出、等などこの恐怖がこの地域にはない。刈羽の旧道沿いに全壊半壊が点在しているのを確認。又 JR 越後線の線路盤が移動変形し線路がいたるところでうねる。復旧には時間が掛かる。

原発のお陰で道路の整備が出来ており、所々の橋脚土盛りの沈下がある程度。

だが、刈羽村の住民は JR の開通が何より待ち遠しいのではないかと思う。

刈羽村役場災害ボランティアセンター。7/19 現在柏崎市はボランティア募集していないが、刈羽村は募集中。50 名/日程度が来村している。行政規模からいっても 34 戸全壊・中半壊 94 戸は規模が大きい。ボランティアのメンバーにそれなりの緊張感とコーディネーターの疲労感もある。

田んぼに囲まれたこの風景は、中越地震の時の三島町に何故か似ている。

### 長岡市 小国地区

道路・公的施設に関しては目視する限り異常は全くなし。

長岡市役所・小国支所を訪ねてビックリ。全く正常、静まりかえって正常勤務状態。全壊 1 戸。

被害のない被災地とは……。期日前投票のスタッフが暇そうに見返していた。

### 長岡市山古志地区

小国地区の平穏さに上げた拳が降るせすにいる気色悪さも手伝い、此処まで来たのなら山古志に入ろうと合意。移動を開始した。旧山古志村に入ったのが PM16:00 過ぎ。山古志支所から河道閉鎖の木籠地区に向かう。沿線の山容・道路整備の変容に驚く。一体何百億を投じるとこうなるのか。未だに彼方此方に工事が進む。旧村全体が開発整備事業の状態と云っても良い。蝸の声に迎えられ木籠地区に到着。河道閉鎖され流出土砂に埋もれてそのまま放置保存されている民家群。その一棟に 80 過ぎの男性と出会う。仮設住宅に住む元大工職。

はきはきした物腰から長い修練の軀を持つと理解できるお爺さん。時々来ては「住めない家」を「手入れ」するのだそうだ。半分埋まり放置され、水位が上がれば流れに晒されている家屋群。さびしさと哀れさを感じさせるが、住んでいた人々にとっては生きていた証そのものなのである。「住めない家」にしたのは災害でも、住めないまま朽ちる運命の「我が家」に「手入れ」をする思いを、建築家の一人としてどれだけ理解しているのか。自責の念に囚われる。

災害慣れた緊張感のない被災地と、被災 4 日目これからをどうするのか苦悩が始まった被災市民間の温度差・行政のマニュアル慣れた「これ以上は出来ない」と公言する軽薄さ。山並み一つ違いの集落との極端な温度差がよくわからない「余所者」の我々。そして激甚災害の体験の実証者の木籠の放置家屋の夕闇の姿。……………長い一日を埼玉川口に向けて帰路につく。

メディアの報道で判った振りする専門家になりたくない、震災のたびに現地足を運ぶ。実際にこの目で確かめることはやはり大きな成果を感じます。柏崎周辺を中心にこれから被災度判定の動員が始まると思います。ぜひ多くの JIA メンバーが現地に入るべきだと思います。市民の視線で何が起きたのか、災害慣れをしていく行政や公的機関の温度差を感じて欲しいと思います。

首都圏や中部や関西圏の都市機能被災ではない、地方の小規模な震災で有ることは事実です。

でもこの地震災害から学ぶことはものすごく多い。率直な視点で語り合い今後につなげる事が大事だと

思います。最後に亡くなられた 10 名のご冥福を心からお祈りいたします。